

## イザナキ・イザナミ神話の冒頭部を

如何に解するかという事について

福 島 秋 穂

記紀両書の冒頭部に見られる所謂系譜型神話に関しては、此れまでも諸先学により各方面から種々の考察が試みられてきているが、時間の推移に従い物語を順次展開させるといふ構造をもった系譜型神話が完成するまでには、其の自然変化は別にしても、其の骨格を形成する神話群に対し、文献記録者たちによる意識的或は無意識的変改や各種物語構成要素の付加挿入が為されたため、系譜型神話に組入れられた個々の神話の源流が何処にあるのか、また其れらが本来それぞれ創作者たちにとって如何なる意義を有するものであったのか、等々の諸問題を解明することは極めて難かしいこととなっている。

神話の解釈が容易ならず、しかも其の解釈が区々であることの原因が、凡て其の構成の複雑さにあるのではないが、我國の文献記載神話、特に記紀に見られる其れの如き作爲的系譜型神話の解釈が一本に纏まらないことの原因の一半は、やはり其れが民衆の原始的思考から直接生まれたままのものではなく、文献記録者により種々の構成要素を巧みに配合された結果であるという点に存

していると言える。

従つて、私たちが其の解明を試みる際には、どの部分が其の骨格根幹をなすものであり、孰れが其れに対する後の付加的要素であるかを充分見極めてかかることが肝要である。

此の度は其の意味で、記紀載録神話に見られるイザナキ・イザナミ二神の出現から、其の二神の婚姻の結果によるヒルコ誕生までを考察の軸上に載せ、其の発生原初形態が如何なるものであったか、其れが神話を発生せしめた人々の間にあつて如何なる意義を有するものであったか、また其れが如何なる要素を付加することにより、今日私たちの眼にする如きものにまで変化成長したのかといったことを考えてみることにしたい。

\* \* \*

記紀に載録された我國の神話は、其の冒頭部に於いて、諸々の神的存在態の登場を、極めて言葉少なに述べているのに続いて、一二の例外を除いては二度と其の名前の聞かれぬ此れらの諸神とは対照的に、其れ以後の記紀載録神話のかなりの部分にわたつ

て活躍することになるイザナキ・イザナミ二神の登場と、彼らの婚姻及び其の結果としての国土・神々の誕生を語っている。

我國の文献記載神話、就中記紀に採録された其れは、其の發生原初の形態に、諸々の構成要素が次第に付加或は挿入され、更にはまた其処から或る要素が脱落することにより成つたものである点に於いては、他国の神話・伝承の類と全く性質を同じくしているが、發生の時期や出自・伝承者を異にする神話群が、時間的經過に従うよう配列表記され、物語の進行と共に漸次神の時代から人の時代へと移行し、しかも各神話群に登場する神々が血縁關係を有する如く表現されているという点に於いては、ギリシアを初めとする諸国の神話・伝承の類とは全く異なっていると言える。此の特徴は、イザナキ・イザナミ二神が主人公として活躍する神話と其の前後に位置する神話との間にも明らかに見られるものである。

イザナキ・イザナミ二神に関する神話が、既に其の發生原初の時点に於いて、今日其の前面に記載されている神話と結合していたものでなかつたと思われ、イザナキ・イザナミ二神の登場以前に見られる諸対偶神の羅列が、早く諸家の注目した如く、其の神名表現に託して、国土の順次成立していく様を描写していると考えられるのに対し、其れらの諸神に続いて、やはり対偶神の形で登場するイザナキ・イザナミ二神が、其の神名を如何に解するとしても、国土の段階的成立とは全く無關係であること、従つて対偶神表記の最後部にイザナキ・イザナミ二神の名を挙げてあるのは、次に此の二神が登場・活躍する物語を接続させ

るための伏線であるとしか考えられないこと、対偶神の神名表記による国土の漸次的完成表記と、後にイザナキ・イザナミ二神により行われる国土の生成譚とが、明らかに重複していると考えられること、諸対偶神の表記されている部分が、全く無味乾燥と言つて良い程に物語性を欠いているのに対し、イザナキ・イザナミ二神の神話は、其の欠を補つて余りあること、などによつても明らかである。

また更に、イザナキ・イザナミ二神に関する神話自体も、其の内容により、幾つかの構成要素に分解することが可能であり、其の各構成要素は、それぞれ初め民間に於いて、他とは全く無縁のものとして別々に發生し、伝承の間に、或は記録時に、此の二神の名の下整理統合され、今日私たちの眼にする如き形態に落着いたものと思われる点をいくつか有している。

幾つかの構成要素が混入している神話を、其の發生の原点にまで溯り、各要素に分解することは、極めて難かしいことであるが、イザナキ・イザナミ二神の神話では、神話展開の場・国土及び神々の生成・妻神の死等の記事を目安に、二神によるオノゴロ島の完成と婚姻及びヒルコの誕生譚をまず諸対偶神の出現を表記した部分に続く一連の物語として挙げる事が出来る。此の後に続く二神の国土生成譚は、其の婚姻の結果として国土が産出されるという物語であつて、オノゴロ島の創造譚とは自ら異質のものである。

\* \* \*  
イザナキ・イザナミ二神の神話のうち、其の冒頭からヒルコの

誕生までは、非常に大雑把な分割の仕方ではあるが、一連の物語と見做すことが出来、しかも此の部分は、其の構成要素に従って更に細分化することが可能である。即ち、各異伝により其の表現形式に多少の相違はあるが、各構成要素を比較的良く備えていると思われる記及び紀本文及び其の一書の記事を基礎資料に、他の一書を参考資料として、其の構成を見ると、凡そ、

- 1 二神が、A(天上)浮橋の上 B(天霧)の中 C(高原)よりアメノスボコを指し下して探ると、其処は海であった。
- 2 ホコの先端より滴瀝する潮が、オノゴロ島となった。或は、ホコで探り成したのがオノゴロ島であった。

3 二神は、オノゴロ島に降り、結婚した。

4 二神が結婚することによりヒルコが誕生した。

5 二神は、ヒルコを葦船に入れて流した。

という具合になっており、記載載録の神話では、此の後に所謂大八島国の生成譚を連結させている。

\* \* \*

以上の如くイザナキ・イザナミ神話の冒頭部は、わずか五个の主構成要素より成る神話であるが、其処に他の要素が種々混入しているため、其れが民間に於いて本来有していた意義を究めようとする者の説は区々として定まらず、従つて個々の構成要素の解釈もまたそれぞれに異なつたものとなつてゐる——此のことは或は逆に、各構成要素の解釈が種々に分かれるが故に、其れらによつて成る神話全体の意義が異なる結果となり、様々の説となつて現われてくるのだと言つた方が良いのかも知れない。

以下、此のイザナキ・イザナミ神話の冒頭部に対する諸家の見解を二三挙げ、然る後に自説を述べて、前記した目的を果たすことにしたい。

\* \* \*

まず、神は人なりと断じた新井白石は、「此一節は天神伊弉册の神舟師をひきゐて海にうかび西に下りて一島に至り給ひしに初には其島神迎戦ひぬれども終には自ら来り降りたれば天神所賜の宝戈を建て其地を得給ひし事の標とし・・・」と、此の神話を古代史実の反映であると解している。イザナキ・イザナミ二神に関する神話のうち、其の冒頭部——現在私たちが考察の対象にしている部分と、其の後に続く所謂大八島国生成譚を連続させて——を、史実の神話化されたものであるとする者は、其の説くところにも多少の相違は認められるが、一人白石のみにとどまらない。神話を、史実に基く譬喩文であると解する事は、確かに神話解の科学的方法の一であり、少なくとも私たちは、数ある神話の中に明らかに史実を神話化したと見做し得るもの存在することを否定することは出来ない。しかし、或る神話が史実の反映であるとするためには、神話の原作者(即ち民衆)或は伝承者が、何故史実をそのまま史実として表現せず、神話の形式を借りて其れを表現しなければならなかつたのかという極めて初歩的な疑問に対し、充分納得のいく明確な解答を与えることが必要とされ、もし其れを判然とさせることが出来なければ、其の神話を史実とする解釈は既に出発点から誤つてゐるものとされても仕方ないの

である。

扱つてそれでは、私たちが此處で問題にしているイザナキ・イザナミ二神の神話を、歴史上の事実の反映であるとするのならば、其の歴史上の事実をそのまま事実として表現せず、敢えて神話化しなければならなかつた理由は一体何だつたのだらうか。一步譲つて、仮りに神話の背後に想像される如き歴史上の事実があつたとしても——確かに現在イザナキ・イザナミ二神に比定されている人物が、日本列島を発見、其の国土を拡張・経営するには、非常な困難が伴つたことであらうが——其の経験は全く一回性のものであつて、神話發生の根本条件となる民族の神話創作意欲其のものゝ覺醒を促し得たかどうか甚だ疑問である。少なくとも此の神話が、其の始めより特定の少数集団の人々により創作伝承されたものではなく、一般民衆の間に生まれ、そして後世に語り伝えられることによつて、記紀或は其の資料文献の成立時に至るまで保存されていたものであるとする限り、其れが如何に国土の発見と経営というが如き大事件であつたとしても、一回限りの史実を神話化したものであるとは、到底考えられないのである。

叙上の如き神話即歴史なりとする解釈に対し、イザナキ・イザナミ二神の神話冒頭部を、此の場合もやはり大八島國の生成譚まで一連のものと考えての上で、男女の性行為を神話として表現したものであるとする説がある。此の解釈は、記紀の記事に、二神の性行為及び其の結果としての国土・神々の誕生が描写されていることに直接の根拠を有するものであるが、橘守部をはじめ服部中庸・富士谷御杖など、多くの人々によつて唱えられている。そし

て此の解は現代に於いてもかなり有力なものであつて、「原始民族並に未開民族の伝説には、臆面もなく生殖關係の事柄が物語られ彫刻に絵画に極めて露骨な裸体人像を描いて、尚ほ恬然恥づるところがない。従つて我邦の太古に於ても亦た、之れあるを見るのは極めて自然である」というような事実も手伝つてか、アメノヌボコヤ、二神が婚姻を為すに際して巡つたとされる天之御柱等の語句を如何に解するかということに関連して、絶えず主張されているのである。

イザナキ・イザナミ二神の神話のうち、私たちが現在考察の俎上に載せている部分及び其れに続く国土や神々の誕生譚が、叙上諸家の説くように男女の性行為と其れによる結果を暗示していると解することは、確かに不可能なことではない。此の神話の最初の創作者はともかくとして、其の伝承者たちが、其の口承伝達に際し、性行為を連想していたことは、其れが男女二神の婚姻を語り、また出産という事実に関わりある物語であるが故に、決して考えられないことではない。しかし、此の神話凡てが男女の性行為其のものを神話化したものでないことは、前に記した諸学者が、矛やオノゴロ島成立の様子を描写した部分を解する際には自説を強く主張しながらも、其れらと同様此の一連の神話中で重要な構成要素の一となつていて天上浮橋の解に関しては沈黙を守り、或はまた性行為とは全く關係ないものとして其れを説明しなければならなかつたという一事によつても明らかである。それに、前記した神話即史実なりとする説に対すると同様、私たちは、性行為の描写を神話化しなければならぬ理由が一体何で

あるか判然とした解答を見出すことが出来ないのである。同様のことは、此の神話を「製塩」と関係づける説や、「澱粉を煮固める時の光景」と結びつける説についてもいえよう。

イザナキ・イザナミ二神に関する神話の解釈として、今一つ見るべきは、此の二神が本来全く異なる性格と由来を持つ神々であり、それぞれが主人公として登場する別個の神話を合成して出来たもの、其れが此の神話であり、其れは天父と地母の分離を説く所謂世界開闢神話の一であるとする説である。

原初互いに相擁していた男女の二神が離別——恐らくは夜明け時の東方に見られる天と地の曙光による分離という眼前の光景に、其の根元的な発生の因を有すると思われる——することに由り、現在の如き天と地が形成されたのだとする神話は、世界各地に広く見られるものであり、確かに我國のイザナキ・イザナミ二神にも、其れらの神話に登場する天父や地母と同様の性格が濃厚であると言える。しかし此のことは、イザナキ・イザナミ二神が姿を見せる神話凡てを見渡した結果言えることであり、少なくとも此処で私たちが考察の対象として採りあげている二神の神話に於いては、此の両者が天と地を象徴するものであるとすることに足る証拠は稀薄である。そして何よりも大事なことは、二神の登場する神話群——現在其れは私たちが眼にする如く、一連のものとして存在しているのであるが——が、果して其の発生の原段階より、今日私たちが記紀に於いて見る如き形態のものであったか、即ち、男女二神——或は其の孰れか一方——を登場させる神話の産出に際し、古代人が絶えず其の脳裡に、将来其れらが一本に纏

められることを予想し、しかも天父地母の觀念を保持し続けていただらうかということである。私たちが今日眼にする二神の神話が、発生時期や創作・伝承者を異にする神話群の結合統一体であつて、其の根幹部を成す神話に種々の物語構成要素が付加挿入され、雪連磨式に成長した結果であることは、前も述べた通り、其の構成様式或は物語の展開を見れば自ずから明らかである。従つて、現実に存在する神話の主人公が天父地母の性格を有するということと、其れらが発生原初時より其の性格を持っていたかということとは、自ずから別の問題でなければならない。イザナキ・イザナミ二神の神話は、恐らく其の初めにあつては、名前すら持たなかつた男女の物語が、幾つか集合することによつて出来上つたものであることを、私たちは忘れてはならないのである。

\* \* \*

以上のような諸解釈に対し、イザナキ・イザナミ二神の神話冒頭部を、所謂洪水神話——洪水を主要素とする凡ての伝承を、神話の名称で呼ぶことには無理があり、明らかに神話の範疇に属さないものもあるのだが、此処では便宜上統一して話を進めていくことにする——の一として解釈しようとする説がある。此の説は、叙上諸説に較べ新しく唱えられ始めたものであるが、イザナキ・イザナミ二神の神話冒頭部を一個の独立した神話として扱える時、多くの見るべき点を持つており、私も二神の神話冒頭部を解するには、此れによるのが良いように思い、此れまでも其の様に解釈してきたのであるが、現在では多少此れに補足をすべきではないかと考へている。そこで此処では、其れが果たして洪水神

話として解釈され得るものであるか、もし其れが所謂洪水神話の一であるとすれば、何時・如何にして其れが我国に出現し、記紀の神話に採り入れられるようになったのか等々の問題について考え、合わせて自説を述べてみることにしたい。

\* \* \*  
抑々、我国の神話・伝承と所謂洪水神話とが関連を有すると論じた説は非常に新しいものであり、我国に於いて神話・伝承に対する解釈が試みられるようになって久しい間、我国の神話との関係を論じたものは勿論のこと、洪水神話其れ自体について考察したものはほとんどなかった。

平田篤胤は、始めて諸外国、特に中国の洪水神話——勿論、平田篤胤の時代の我国には、「神話」という言葉はなかった。此の語が我が国で始めて用いられたのは、明治二〇年代の後半である——に注目したが、「外つ国々の洪水の時代は、皇国にては、神代の末にあたるを、いさゝかも、然ることの有りける状に、思ひ合さるゝこともなし」と述べ、我国には洪水の話が見られないが、其れは我国が諸外国に較べ高い土地にあるからだとしている。更に、現代の学者で洪水神話に言及した者も、「洪水神話の場合に於いて、我邦はアフリカの大部分と同じくそれを欠いてゐる」と言い、或はまた「日本には洪水神話なるものがない」と断言している。其の一方に於いては、「日本の神話に洪水の物語がないのは實際である」と疑問を抱きながらも、結局イザナキ・イザナミ二神の神話に洪水神話の構成要素と重複するもののあることに思い到らず、更に我国の神話伝承中に洪水神話の存在を認

めた者も、スサノヲ神によるヤマタノヲロチ退治譚をもって其れであるとして、イザナキ・イザナミ神話の冒頭部に其の存在を見るに到っていないかった。

叙上の如く、我国では神話・伝承の類に対する研究が行なわれるようになって長い間、洪水神話を考察の対象として採りあげることがほとんどなく、偶々其れを採りあげ、しかも其の際、我国の神話・伝承にまで言及することがあつても、結局は我国に其れが全く見られないとしたり、或はイザナキ・イザナミ二神の神話以外の部分に、其の存在を認めたりしたのであるが、一四八八年に至つて、漸く岡正雄博士が、「イザナキ・イザナミ神話も、すくなくともその前半は洪水神話の断片とも考えられはしないか」と発言されるに及んで、始めて現在私たちが組上に載せている神話と洪水神話とが結びつけて考えられるようになったのであつた。しかし、氏の説は、ただ南シナ・東南アジア諸種族の伝承する洪水神話が、我国のイザナキ・イザナミ神話と類似することを指摘するにとどまり、其の間の比較検討が細かい点にまで及んでいない。そこで私たちは、我国の神話について云々する前に、まず、諸外国に伝承された洪水神話が如何ようなものであるか、我国の其れとどのように類似しているのか、或は相違しているのかといった点から考えてみなければならぬ。

\* \* \*  
洪水神話として世に広く知られているのは、『旧約聖書』に記された所謂ノアの箱舟譚であり、其れによると、創造神は地上に人間たちの犯す罪惡が増加するのを見て、人間を絶滅せんとした

が、其の際ノアと称する男だけは神の指図に従い、箱舟を建造、妻や子と共に助かることが出来たという。同様の話は、バビロニア・アッシリア、シュメールの神話にも見られ、現在では其の間の関係が、シュメール神話→バビロニア神話→聖書記載の物語、という伝播の形で説明されている。更にまた、ギリシアに於いても此れらとほぼ同様の話が伝承されていたことが知られている。地理的文化的関係から考え、此れも恐らく一方から他方へ伝播されたものかと思われる。

洪水神話は、広く世界中の凡ゆる地域に分布しており、何故か洪水とは全く無縁と思われる山岳地帯や、河川・湖水の見られぬ内陸地方、其れも砂漠地帯にまで広がっている。今、其の二三の話を取ってみると、北アメリカ・エスキモーは、

地震と同時に起った恐ろしい氾濫で、あつという間に国土が押し流され、わずかな人数だけが独木舟に乗って、恐れおののきながら最も高い山々の頂に脱れることができた。<sup>註15</sup>

と伝え、メキシコのアズテック族からは、

人類は洪水によって絶滅せられたが、コックスコックストリという男とクソチケツアルという女は小舟に乗って逃れ、コルフアカンと呼ぶ山に漂着した。<sup>註16</sup>

という話が採集されているといった具合である。

本論展開の都合上、インド或は東南アジア・台湾・日本列島に属する幾つかの島々に於ける類話は後に挙げることにし、此処では此の程度の引用にとどめ、次に世界各地に伝承された洪水神話

の構成がどのようになっているかを見ると、其れらは、ほぼ、  
1 太初大洪水が起つたが、其の時人類は既に地上に存在していた。

2 此の洪水の原因は、A 人類の墮落 B 偶然的出来事 C 自然発生 D 不明（特に触れていない）の孰れかである。

3 此の洪水により、ほとんどの人たちが死んだが、極めて少数の人（時に一組の男女、或は稀に男女の孰れか一方）だけが生き残った。

4 生存者は、A 船或は筏・流木の如き浮遊物 B 高山 C 樹木 の孰れかにより難を避けることが出来た。

5 生存者が其の後の人類の祖となった。  
の各構成要素に集約することが出来る。

前に記したイザナキ・イザナミ二神の神話冒頭部の構成要素と、世界各地の洪水神話に共通して見られる以上五個の構成要素とを比較してみると、前者の構成要素である1が、大洪水の襲来と其の生存者及び彼らが浮遊物により溺死を免れたことに比定出来、3・4が後者の5に相当することに気付くのである。しかし、此れだけの類似で、イザナキ・イザナミ神話の冒頭部を洪水神話の一であると断定する訳にはいかない。そこで今少し細部に渡つてイザナキ・イザナミ神話冒頭部の構成を分析し、其の構成要素がそれぞれ洪水神話を構成する要素に比定し得るか否かを、我国周辺に於ける洪水神話の例を挙げ、其れらとも比較しながら検討してみることしよう。

記紀載録神話の構成要素のうち、二神が天上(浮橋(或は天霧之中(高天原)よりアメノヌボコを指し下して探ったところ、其処は海であったという冒頭の其れから、私たちは物語がまず原始水とも言うべき海原の存在を既成事実として認めていることを知るのであるが、此のような原始水の存在については、同様の話が、マージナル群島、ヤップ島、ニウエ島、ボルネオ・ドウスン族、同カヤン族、アドミラルティ群島、ナウリ島、ミナハッサ島、マレーケサス群島、ソサイエティ群島、サモア島、インド・ムンダ族、中央アメリカ・グワテマラ、北アメリカ・イロクオイ族、カナダ等々、主に太平洋に散在する島々及び東南アジアからアメリカ大陸にかけて分布していることが知られている。我國の神話に見られる原始水も、恐らくは此れら諸地域・諸種族の伝える神話・伝承中の其れと何らかの關係があるのだから。

原始水の存在から此の世の始まりを述べる神話・伝承が、世界の各地からかなり多く報告されているにもかかわらず、私たちは其の原始水の存在する理由・原因を説いたものを見出すことがほとんど出来ない。しかも、洪水—原始水という關係(洪水が起ったが故に、水が世界を覆っているのだとする關係)を明らかにする神話・伝承の類となると、これはもう皆無に等しいほどである。恐らく洪水神話と原始水神話とは同じ水の存在を語るものでありながら、其の發生は全く別のものであったのだから。此のように考えてくると、イザナキ・イザナミ神話の冒頭部は、或は洪水神話の前半部が脱落したのではなく、原始水のモチーフと洪水神話の後半部とが結びついたものであるかも知れない。

次に、ホコの先端より滴瀝る潮がオノゴロ島となり、或は二神がホコでオノゴロ島を探り成した、というイザナキ・イザナミ神話冒頭部第二の構成要素であるが、此れに良く似た話として、超自然的存在態としての神が水底から島を釣り上げる話、或は主として動物が水底から運んできた泥土により、創造主が陸地を造る話が、世界の各地で採集報告されている。其の分布状況について言えば、前者は、マレーケサス諸島、ニウエ島、ニュー・ジールランド等所謂南洋諸島に多く伝承されており、後者は、北アメリカ、北アジア、東南アジア、インド等に多く見られる。普通には、前者は島釣り型神話、後者は潜水型神話と呼ばれているものである。此の両者の孰れが我國の神話と結びつくものであるか判然としないが、恐らく其の一方、或は両方が我國に伝播し、文献記載神話の一部にまで成長したのである。此の二つは孰れも原始水の觀念と結びついている場合が多いので、我國にも原始水と共に入ってきたものと思われる。

最後に3・4の構成要素即ち、二神の結婚とヒルコの誕生について述べるならば、男女が結婚し、最初異物を産むが、後に正常な子を得るといふ話が、各地に伝承されており、しかも其のほとんどのものが、洪水神話の最後部に位置していることが知られている。洪水神話の中で、洪水の難を逃れた兄妹が結婚し、子孫の繁栄をみたという話は、インド、東南アジアに広く分布していることが知られているが、一組の男女(其の多くは兄妹であると考えられる)だけが生き残り、其れ以後の人類の祖となったとし、しかも第一子が異物であったとする話は、タイ族、台湾阿眉族、苗



族、倭族、侗族、ロロ族、カチン族、フィリッピンの二三の種族等々、南中国から東南アジア在住の種族に多く見られる。我國のヒルコ誕生譚も、恐らくは此の系列に入るものであろう。

\* \* \*

朝鮮・台湾等我國近隣諸國も諸外国の其れと同様の洪水神話を伝承しているが、此処では紙幅の関係上其の引用を割愛し、我國の文献記載神話との間に少なからぬ關係を有すると考えられる日本本土近在の島々の伝承を二三挙げてみよう。

まず八丈島の伝承では、

この島が覆没し、人畜が溺死したとき、ただ一人円娜婆とよぶ妊婦が樞の木を抱いて助かり、死をまぬがれた。やがて男の子が生れ、円娜婆はその子と交つて子孫をうみ、しだいに繁殖して今日にいたつた。<sup>註17</sup>

と言ひ、宮古島では、

或夜大海嘯が襲つて来て人家は皆洗ひ去られて荒れ果てたが、アマリ大ツカサといふ美しい女子は、難をのがれてアマリ山の嶺の上に草庵を結び独り住ひし、一匹の犬を愛養して暮らしていた

と伝え、其の娘が倭人と結婚、子孫が繁栄したと続けている。更

に宮古諸島中の多良間島でも、古昔洪水が島を襲い、一組の夫婦を除く凡ゆる人々が死滅したが、其の二人より現在の子孫が生じたと言ふ。また、八重山群島中の鳩間島では、

昔、鳩間島に大津波がおそい、人々は皆、津波にさらわれてしまつたが、兄妹だけが、島の一番高い所にやつとのがれ

た。・・・(中略)・・・坂道で妹が石につまづき倒れた。すると兄も妹につまづいて妹の上に打ち倒れ、二人は結ばれた。妹は兄の子を生み、それ以後、子孫の繁栄をみた<sup>註18</sup>と伝えている。宮古・多良間・鳩間の三島は、それぞれ距離的にかなり近い位置にあるが、叙上の諸伝承を見較べると、洪水の發生という基本的要素以外の細かい部分においては、それぞれが構成を異にしているので、恐らく此れらの各伝は、其の發生根源を同じくするとしても、互いに無縁のものとして成長したものでないかと思われるのである。

\* \* \*

叙上の如く我國の周辺諸國に於いて、原始水の存在、島或は陸地の釣り上げや創造、近親者による婚姻と奇型児(異物)の誕生等、イザナキ・イザナミ神話冒頭部と其の構成を同じくする話がかなり数多く採集報告されているのみならず、日本本土に近隣する島々に洪水神話が伝承されていること、またイザナキ・イザナミ神話の冒頭部自体が、世界に広く分布する洪水神話の構成要素と重なり合う要素を備えていることを思えば、私たちが此処で問題としている神話は、類似する各神話・伝承の採集事情が区々であるという難点——此れは所謂比較神話学と呼ばれる学問の最大の欠陥とも言うべきものであり、此れまでの学者たちは、此の点に全く触れなできたが、今後此の難点も、類話資料に対する整理・研究が行なわれることにより漸次排除されていくと思われる——を認めるにしても、前記した如く史実や性行為の神話化或は天父地母の神話と解するより、洪水神話の後半部であると解する

方が良いように思われる。しかし其れも、岡正雄博士の言われるように、単に洪水神話の前半が脱落したのではなく、我國のイザナキ・イザナミ神話の冒頭部は、南方世界から伝播した原始水の話に、洪水神話の後部が接続することによって成ったものではあるまいかと思われる。

もし、イザナキ・イザナミ二神神話の冒頭部が、ただ単に洪水神話の前半部を脱落させたものであるとするのならば、其の脱落の原因が考えられねばならないのであるが、民衆が何の理由もなく、祖先から伝えられた共有財産の一とも言うべき伝承を二分し、其の一半を棄てたとする説を、積極的に支持するための根拠・理由は全く見出せない。文献記録者が其の記録時に、神話の系譜型表現を目的として、意識的に洪水神話の前半部を除去して、採録したと考えられないことはないが、前に見た如く、記紀両書に見られる幾つかの異伝が凡て其の前半部を欠いているのであるから、まず此の考えは成立しないことになる。それに、たとえ系譜型神話作成のためであっても、其の製作者たちの神話改竄能力をもつてすれば、洪水神話を採用するのに、其の前半部を脱落させる必要は全く認められなかつたと思われるのである。しかし、現実には我國の神話に洪水神話の存在が見られ、しかも其の前半部が欠けていることからすれば、或は、日本列島に早くから原始水神話の存在が見られ、其処へ後から洪水神話が伝播してきたので、其の前半部が原始水のモチーフに何時しかすり替つていったのではないかと思われる。

\* \* \*

イザナキ・イザナミ二神については、其の名義に関し種々の説が提出されているが、恐らく其れが登場する物語の発生原初時に於いては超自然的な能力など持ち合わせてもいない単なる人間の男女であり、しかも固定した名前すらも持たなかつたものが、何時しか神格化され、時の経過と共に其の物語が成長し、或は全く発生を異にする男女の物語が幾つか集合した結果、今日私たちの眼にする如き体系的な神話の主人公となつたのであろう。そして、二神の神話冒頭部が、私の考えるように原始水神話と洪水神話の結合したものであるとするならば、此の部分を性行為の描写であると主張する人々が、其の有力な根拠の一として提出するアメノヌボコは、物語の発生原初形態に於いては、洪水を逃れた男女、或は原始水の上を漂流する男女が、陸地を探ろうと水底に降ろした棹、または鳥釣り型神話に見られる釣針の如き物であつたと解することが出来る。其れが伝承の間に盡力を有するものと考えられる矛にまで変化したのであろう。

天浮橋は、此のヌボコ同様、本来水上を漂う浮遊物として語られていたものが、此の物語の前面に天上界に於いて神々が出現する話が接合された関係で、恰も天上界と地上界を結ぶ橋或は階段の如く解され、表記文字も其の義に相応しいものが選ばれるに至つたものと思われる。紀の異伝に、天霧或は(高)天原更には天上浮橋となつているのは、天浮橋の原義が忘れられた結果であらう。そして、言うまでもなくオノゴロ島は、水上を漂う男女が水底より釣り上げた陸地であり、ヒルコは、男女の主人公が結婚した結果生まれた不具児或は骨無し子の類ではなかつたかと思われる。

しかも此のヒルコの誕生から考え、物語の發生原初時に於いて、其の両親たる男女は、或は近親關係にあつた者かとも思われるのである。<sup>註24</sup>

以上の諸要素により構成された物語、即ち、浮遊物に乗って水上を漂う一組の男女が、水底より陸地を釣り上げ、其処に上陸、結婚して産んだ最初の子が不具児であつたという物語に、種々の物語構成要素が付着し、しかも其の物語自体が伝承の間に変化成長していった結果が、今日私たちの見ることの出来る神話であると思われる。

最後に、それでは何故我国に洪水神話が存在するのかという問題が残るが、此れは恐らく、其の原發生因が何であり、原發生地が何処であるのかは判然としないが、前にも一寸触れたように、我国で独自に発生したのではなく、其の構成要素が世界各地の洪水神話の構成とほぼ一致することから考えて、他の地域からの伝播によるものだろう。

我国文献記載神話の中に見られる他の幾つかの神話構成要素の如く、そしてまた、中央インド西北部に住むブイル族では、人類が洪水を逃れた兄妹より生まれたとし、<sup>註25</sup>タイでは、三年にもわたつた洪水により、地上の凡ゆる生物が死に絶えたが、瓢箪の中に隠れた兄妹だけが生き残つて結婚し、

しばらくして妻は身ごもり、一つのひょうたんを生み落としました。・・・(中略)・・・やがて、その種が根づいたところには、たくさんの実や人、動物や植物などが現われまし

と伝え、台湾にも、<sup>註25</sup>

大洪水アリテ家ヲ失フ其時テアマサンハビリカラヲマキロクノ二神ヲ残シテ外出シタル折ナリシカバ二神ハ姉ヲ見失ヒタレドモ幸側ニアリシ「ドゥラン」(靱白)ニ乘リテ辛クモ生命ヲ拾ヒ、サツラアント云ヘル山ニ漂著シヌ是ニ於テ兄妹ハ「バイシン」トハ知リツツモ其ヲ犯シテ夫婦トナリトロブ及マライコラットト云ヘル男女ノ二神ヲ産メリ<sup>註24</sup>

という話があるように、其れは、東南アジア→台湾→日本列島周辺の島々→日本本土、という道程を経て我国に伝えられたのであろう。

註1 新井白石著『古史通』巻之一。

2 萩野由之著『日本歴史評林』第一編四頁。武田祐吉著「大八島の生成(古事記)」——『国文学 解釈と鑑賞』第一巻第三号五頁。斎藤昌二著『日本古代史攷』上巻二〇九頁。滝巽著「伊邪那岐命伊邪那美命及その時代に就いての一考察」——『国学院雑誌』第四〇巻第七号五〇頁。猶、吉田東伍著『地理的日本歴史』五一六頁は、白石説に異を唱えることにより、神話即史実とすることに反対している。

3 橘守部著『難古事記伝』巻第一。服部中庸著『三大考』。富士谷御杖著『古事記燈神典』

4 移川子之藏著『記』『紀』の遊能基呂島及び大八島国出現に関する土俗学的一見解——『日本民族』三〇四頁。

- 5 荻原浅男著『日本神話の旅』一六頁。
- 6 和辻哲郎著『新稿 日本古代文化』一七六頁。
- 7 沼沢喜市著『南方文化としての神話』——『国文学 解釈と鑑賞』昭和四〇年九月号一六頁。同「天地分るる神話の文化史的背景」——『現代のエスプリ』第二二号五五—五六頁。また、井上光貞著『日本の歴史1 神話から歴史へ』二二頁も、此の説を支持してか、「天地分離神話は、未開農耕民のあいだで世界的に広がっているものであって、東南アジアにも多く、それは日本神話とも関連しているらしい」と述べている。更に、これらの他に、早く加藤玄智著『神道の宗教発達の研究』四三頁も、イザナキ・イザナミ二神の神話を天父地母神話でないかとしている。松村武雄博士は、『日本神話の研究』第二卷一二九—一三四頁にかけて此の説を紹介、批判されている。就いて見られたい。
- 8 平田篤胤著『靈の真はしら』下。
- 9 西村真次著『文化移動論』二〇九—二一〇頁。
- 10 斎藤昌二著前掲書二一六頁。
- 11 アレクサンドル・ワノフスキー著『火山と太陽』四三頁。
- 12 出石誠彦著『支那神話伝説の研究』二八九頁に引用された、白鳥庫吉博士の「日鮮交通の古伝説について」と題する講演。
- 13 『日本民族の起源』四五頁。同様の発言が、岡正雄著『日本文化の基礎構造』——『日本民俗学大系 2』一〇—一一頁にも見られる。

- 14 Gリチャイルズ著・ねずりまさし訳『文明の起源』(上)五二頁。Sリリック著・吉田泰訳『オリエント神話と聖書』四二頁。
- 15 マックススリフオーコンネ著・辻哲也訳『新大陸の神話』一六頁。
- 16 同上書四〇頁。
- 17 関敬吾著『民話』一八〇頁。
- 18 慶世村恒任著『官古史伝』一三一—一四頁。
- 19 鄭秉哲編『球陽遺老説伝』
- 20 村武慶著『琉球八重山の宇宙開闢説話』——『民族学研究』第三〇巻第三号二五七頁。
- 21 拙稿「ヒルコ神話をめぐって」——『国文学研究』第三六集参看。
- 22 Wリッコーパス著・白鳥芳郎訳『未開人の世界観』八一—八二頁。
- 23 池田よしなえ編『ベトナム民話』一五〇—一五一頁。
- 24 臨時台湾旧慣調査会第一部『蕃族調査報告書』——阿眉族馬太鞍社——一七七一—一七八頁。

#### 追記

私は、イザナキ・イザナミ神話の解釈に関して、これまで「やぶにらみ神話論(四) 洪水の話について」——『文芸と批評』第一〇号、「ヒルコ神話をめぐって」——『国文学研究』第三六集、「記載録神話に於ける生と死の起源神話」——『国文学研究』第三八集、の三編を発表しました。論旨や引用した二・三の類話に重複するところがありますが、本論とは多少違った角度から其れを見ています。併せ読んで頂ければ幸いです。